

# 面影

ハーン先生の一周忌に

小川未明

青空文庫



## 一

独り、道を歩きながら、考えるともなく寂しい景色が目の前に浮んで来て胸に痛みを覚えるのが常である。秋の夕暮の杜<sup>もり</sup>の景色や、冬<sup>ふゆ</sup>枯<sup>がれ</sup>野辺の景色や、なんでも沈鬱<sup>ちんうつ</sup>な景色が幻のように見えるかと思うと遽<sup>たちま</sup>ち消えてしまう。

消えてしまった後は、いつも惘<sup>ぼつ</sup>として考えるのである。なんでこんな景色が目に見えるのであろう。誰のことを自分は思っているのか？ 氣に留めて考えれば空<sup>くう</sup>漠<sup>ばく</sup>として、悲しくも、喜ばしくもないが、静かに落付いていると胸の底から細い、悲しい、囁<sup>ささや</sup>きのように、痛むともなく痛みを覚えて、沈鬱<sup>じやくまく</sup>な寂<sup>さび</sup>寞<sup>もく</sup>たる夕暮の田園の景色などが瞭<sup>あり</sup>々<sup>あり</sup>と目の前に浮んで来る。

ああ、自分はなぜこんなに悲しい気になるのであろうか。もうもう彼女<sup>かれ</sup>のことは思い切っているのにと自<sup>みづ</sup>から心を励<sup>はげ</sup>ますけれど、熱い涙が知らずにぽたぽたと落ちる。物の哀れはこれよりぞ知るとよく言ったものだ。自分は曾<sup>かつ</sup>て雑司ヶ谷の鬼子母神<sup>きしもじん</sup>に参詣<sup>さんぎ</sup>して御園<sup>みくじ</sup>を引いたこともあったが……やはり行末のことや、はかない恋をそれとも知らなかったから

である——この道を行けば、やがて鬼子母神の境内<sup>けいだい</sup>に出るのだが、もう草は枯れている。  
圃<sup>はたけ</sup>のものも黄ばんでしまった。なんだか斯<sup>こ</sup>う、彼女の面影が目に見えて来る。そういえば  
この道を去る秋、共に通ったことがあったのである。

ああ、もうもう思うまい思うまい、悲しいんだやら、こう気が焦<sup>い</sup>つてくるばかりで、や  
はりこれが悲しいんであろう。涙が知らずに湧<sup>ま</sup>いて来る。

どれ、ハーン先生の墓にでも詣<sup>ま</sup>ろう。……

## 二

思えば一昨年<sup>おとし</sup>、ちょうど季節は夏の始めである。青葉の杜を見ても、碧<sup>へき</sup>色<sup>しよく</sup>の空を見  
ても何となく、こう恋人にでも待たるるような、苦しいかと思うと悲しいような、又物哀  
れな慕わしげな気持のする頃であつた。

自分は学校の窓から裏庭<sup>うらて</sup>の羅漢松<sup>くさまき</sup>の芽の新なる緑を熟<sup>じつ</sup>と見<sup>み</sup>入<sup>みい</sup>つて色々の空想に耽<sup>ふけ</sup>つていた。  
するとベルが鳴つてハーン先生が来たのである。この日初めて先生の顔を見るのだ。

まず空想に浮んだのはこの人が希臘<sup>ギリシヤ</sup>に生れ、西印度<sup>にしインド</sup>諸島や、その他諸方を流浪して

来たと言ふことである。背の低いびようもく 眇 目の、顔付かおつきのどことなくおっとりとした鼠色の服を着ていなさる、幾人の兄弟けいていや、姉妹があり、父や母は何処いすくにどうして、而して真面目な恋もあつて、それが成就しなかつたのではあるまいか。などと種々いろいろの空想を廻めぐらしていた。やがて講義が終えてから、運動場に出て、羅漢松の木蔭の芝生の上に腰を下して漫々まんまんたる碧空に去来する白雲の影を眺めてみると、靈動れいどうする自然界が、自ら自我おのずかに親しみ来るように思われる。そこいなき円まるい空、寂しそうな白雲、袂たもとにおとずれる風のささやき。雲を踏み、海を渡り、親もなく、兄弟もなき異郷に漂浪する、先生の身が可哀そうになつて来る。今も尚なお優しい余韻のある、情熱の籠かごつている講義の声が律呂リズム的に耳みみ許とに響といているような。

而して熟々つくづくと穏かな容かおつき貌が慕わしうなり、又自分も到底この先生のようにではないけれど、やはり帰趨きすうなき、漂浪児であるという寂しい感かんじになった。

\*

\*

\*

この光榮ある詩人が、遽にわかに永劫の樂園を慕うて沈サイレンス黙の海に消え、紫色の……さな

がら夢のような……さながら消えた悲みのような、遠いまた杳かな島山蔭の波間に見える、永劫の夏の浄土に憧がれ、漕いで行つてしまわれた夕暮、我れは悲しみにたえやらず、君の行方なつかしく、美しい茜色の西の天空を、野越え、山越え、森越えて眺めやり、松樹影暗く繁る、瘤寺の、湿れる墓畔に香を焼いて、縷々として寂寞の境に立ち上る、細い細い青烟の消えゆくを見るも傷ましく、幾たびも幾たびも空想を破る鐘の響に我れ知らぬ暗涙をたたえたことであつた。——思うともなく、その日のことが思いだされて、未だにその時の光景が瞭々と目に浮んで来て堪えられぬ。

## 三

この春のことであつた。北国のある町を歩いていると立琴のようなものを鳴らして乞食が通るのを見た。その男の容貌がいかに「日まわり」の一章に読だ乞食と似ている。何となく悲しく、鳴らしている立琴の音を聞きつつ、空想に耽つているとその男の姿は遠くなつて見えなくなつた。……ああ、彼も漂浪人かと思うと、つい熱き涙が目の中に湧くのであつた。

ハーン先生の文は、この琴の音の人をひく力のようにどこか哀れな寂しい、細い澄んだ響きを伝えていた。——何となく沈痛！何となく悲哀！の響きがある。

人生には悽慘せいさんの気が浸透している。春花、秋月、山あり、水あり、紅あか、紫と綺羅きらやかに複雑に目も文あやに飾り立てていているけれど、帰きする処沈痛悲哀の調べが附纏つきまとうて離れぬ。酔うたる人は醒むる時の来るが如く、樂たのしめる者、驕おごれるもの、悦よろこべるもの、浮かるるもの、早晩傷み、嘆き、悔い憂うれうる時の来ることを免れない。

誰か青春の美酒に酔うては歌わざらん。誰か凋落ちようらくの秋に遭あうては酸鼻さんびせざらん。人生酔うては歌い、醒めては泣く、就なかんずく中余は孤愁こしゆき極りなき、漂浪人の胸中に思い到る毎ごとに堪えがたき哀れを感じて、無限の同情を捧ぐるのである。

さすらい人！いかなれば君独り愁え多きや。飛ぶ雲の影を見れば故郷の山を思い、うららかなる春の日に立つ野山の霞を見る時は、ありし昔の稚子おきなごの面影しのを思さとがわ流れ迢々ちようちようたるも目に浮び、何処いずこよりか風のもて来る余韻悲しき、村少女むらおとめの恋の小唄も耳に入る。……故郷を離るる幾百里、望めば茫々ぼうぼうとして空や水なる海、山の上にも山ある山国に母を憶おもい、父を憶うて、恋しき弟妹はちからの面影を偲いぶ心如何いかならん。

さすらい人！いかなれば君独り愁え多きや。男子いやく苟も志を立てて生活の戦場に出いで人

生に何等かの貢獻を試こころみと決したる上は、たとえ腸九はらわたたび廻り、血潮の汗に五体むたは瀦ひたるとも野に於いて、市に於いて、鋤すきに、鍬くわに、劍に、筆に奮迅ふんじんの苦闘あえを敢てする腕かみなも、勇氣もあるものの、只ただ彼の浮世の風波に堪え得ぬ花の如き少女、おお、我が恋人は今頃いかに、今宵こよひをいかに送るならんと空の彼方、見よ月に雲のかかり、忽たちまち勇氣の挫くじけて暗やみに落ち行く心地せらる。……煩悶はんもん……懷疑……ああ、いかなればさすらい人！　かく君独り愁え多きや。

ラフカディオ・ハーン先生はた一個のさすらい人であると思う。

\*

\*

\*

見渡せば霞立つ春の海原。波静かなる、風穩かなる、夢にも似たる青き遠山を見るにつけ、黄色なる入江の沙上さじょうの舟や、灰色の市街を見るにつけ、子しの文章を思い起すのである。

北国の春の空色、青い青い海の水色、澄みわたった空と水とは藍とを溶とかしたように濃淡相映あいじて相連つらなる。望む限り、縹縹ひようびよう、地平線に白銀の輝ひかりを放ち、恍ことうとして夢を見るが

如し。彼の浦島太郎が波間に浮べる、故郷の山影の、夢のような景色を眺めたのも、こうであつたろう!! 「夏の日の夢」の記を読んで、今、記憶に残っているのは左の一節である。

“Summer days were then as now, —— all drowsy and tender blue, with only some light, pure white clouds hanging over the mirror of the sea.”

日本海の風に吹かれて、滄浪そうろうの寄せ来る、空の霞める、雲も見えず、麗うらちかなる一日を海辺にさまよい、終日ひねもす空想に耽ひねもすつていたことがあるが、その時子の文章と閱歴しを思い出さずにはいられなかった。赤、黄、緑、青、何でも輪郭の顯著なる色彩を用い、悠悠ゆうゆうたる自然や、黙静もくせいの神秘を物哀ものあわれに写す力があつたのが彼の人の特長である。

自分は希臘の海を見ないけれど、我が春の海を見るたびに何となく懐かしく思う。ああ、緑なる空。青き海原を見れば希臘の空を思い、悠々と白き雲の飛ぶ影を見れば、さすらい人进行、月の光を見ては愁え、貝を拾うては泣き、悲しく吹く風に我が恋人の身の上を思い煩わづらうのである。

#### 四

ただ独り、黄ばんだる林の下道を歩いて、青い空の見える淋しい湿り勝しめがちな小道を行くと、涼しい秋の風が身に浸み、何となく痛みを胸に覚ゆるのである。広い圃の中に出ると、小春日に、虚空を赤蜻蛉あかとんぼが翻々ひらひらと、かよく飛んでいるのやら、枯れた足元の草の上に止とまっているものもある。遠く、うす黒き烟けむりの、大空に溶けるように上のぼっているのも見える。けれど何等の響きも聞えない。左に小道を折おるれば、例の墓所はかしよに出るので、誰れ見るともなく、静かな秋はいつとなく暮くれて行くのである。

自分はこの眩まぶしいような空を眺めて、何となく悲しくなった。

ある日、講義の時間に「とんぼつり、今日はどこまで行ったやら」の句を、

『Catching dragon-flies! .... I wonder where he has gone to-day!』

詩人の情のこもれる、やさしい声で而しかも物哀れに語られたことがあった。而そしてその時に自分は稚児おさなごが現世うつよならぬ薄青い夢の世の熱い夏の真昼頃、なんでも広い広い桑畑でただ独り、その裡うちをさまよいながら、蜻蛉を取っている姿のありありとして見られたのである。

\*

\*

\*

不思議なるは人生の行路<sup>こうろ</sup>、誰か自分の運命を知るものがある。……ふりさけ見れば千里、海や、雲を隔てて異郷の土に冷かに眠るさすらい人の身を哀れむのである。而してもう、あの柔和な面影は再び見られない。艶麗<sup>えんれい</sup>な筆も既に霊なきものとなった。

ただ永劫に吹く風の、悲しい余韻を伝えるばかり。

自分は茫<sup>ぼう</sup>として人の身の上を思っていたが、やがてまた我が身の上を悲しく感ずるのである。光明の郷に憧<sup>あこが</sup>れて、迷う孤雲の如く、幽<sup>かす</sup>かなる光を放ち、漫々たる西の大空に浮ぶ。暗<sup>やみ</sup>、愁<sup>うれ</sup>え何処<sup>はて</sup>に果は落ち行くであろう。……うす紫に匂う、希望の星の光は遠い。……去年<sup>こぞ</sup>の秋、この道を歩いた時は、恋しい影が従<sup>つ</sup>いていたものを……今は思いにやつれしさすらい人！

いでやこの涙を捧げものにして詩人の墓を訪<sup>と</sup>おう。……ああ、おそろしい風！ このあたりは落葉<sup>みち</sup>で径も見えぬ。



# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集1 小説集※」[#ローマ数字1、1-13-21] 講談社

1979（昭和54）年4月6日第1刷発行

初出：「家庭新聞」

1905（明治38）年9月

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 面影

## ハーン先生の一周忌に

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 小川未明

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>